

自然と共に生きるということ…… センターでの3年間を振り返って

いろいろな出会いに感謝

私は平成25年度から3年間（公財）えひめ地域政策研究センターに在籍させていただきました。センターに来た当初いきなり魚島（上島町）へ行くことになったり、四国八十八か所の札所を回るようになったりと、戸惑うこともありましたが、いろいろな地域でまちづくりや地域おこしに奮闘するたくさんの方々と出会えたことと様々な地域の自然を見る機会に恵まれたことに感謝しています。その中でも心に残る出会いをいくつか書いてみたいと思います。

コウノトリの舞うまち

センターの刊行物である「舞たうん」や調査研究情報誌「ECP R」の原稿依頼や取材のためにあちこちを訪ねましたが、その中でも特に印象深かったのは、「ECP R」vol.36の原稿執筆依頼のために、コウノトリの保護・野生復帰と無農薬米の付加価値化が上手くかみ合って成果を上げている兵庫県豊岡市を



豊岡市のコウノトリ

訪問したことでした。一度絶滅に瀕した生き物を復活させることと地域経済の循環はなかなか両立させることが難しいことなので、豊岡の取り組みは非常に興味深いもので、一度この目で見てみたいと思っていました。コウノトリの郷公園に降り立つと、放鳥されて野生に戻ったコウノトリが上空を舞っていることに、まず理屈抜きで感動。さらに兵庫県立大学の江崎先生にお話しをうかがうと、コウノトリの繁殖と野生復帰は成功と言われつつも動物学的にはいろいろな問題を抱えていることや近年は狭い地域内で個体数が増え過ぎていたなどを教えていただけました。

故郷の希少な昆虫を守る

また、西条市（旧東予市）にある、日本最小のハッチョウトンボ生息地の保全や保護増殖の活動をされている近藤さんに伺ったお話も忘れられません。トンボは幼虫（ヤゴ）の時代を水中で過ごすため、生息に適した水辺環境の保全が必要です。日本最小の特殊なトンボの生息の



カバンの自販機

て鞆の製造業が盛んで、街角には何と「カバンの自販機」があることにビックリ仰天。実際に行ってみないとその土地のことは分らないなとしみじみ実感しました。



愛媛県教育委員会事務局
生涯学習課

谷川 昭司

ためにどのような条件が必要なのか試行錯誤しながら、渇水の夏にはタンクで水運んで湿地を維持保全されたという近藤さんのお話しを聞き、先例のないことをやってみる苦労がどれほど大変だったのかと、頭の下がる思いでした。

「自分の代でこのトンボを絶滅させるわけにいかない」という言葉に、経済的な地域の活性化とは異なるこのような活動の動機は、やはり地域の誇りから生まれるものなのだと考えさせられるとともに、その地域の自然に根差したこうした地道な活動が続けられていることをもつと世の中に知らしめることが必要ではないのかと思いました。



ネジバナとハッチョウトンボ

取材の後、もう一度現地へ行き、誰もいない大明神池のほとりで静かに座っていると、足元のネジバナにハッチョウトンボが静かにとまっています。地域の人によって守られているこの小さな昆虫は、本当に大事なことは何かということ語りかけてくれているような気がしました。

高井神島のこと

元気アッププロジェクト事業で魚島へ

何度も出かける機会があったので、せっかくの機会だから隣の高井神島へも行ってみようと思いい立ち、W 研究員と O 係長と 3 人で高井神島へ行ってみることにしました。高井神港に降り立つと、島の人に呼び止められて「あんたらどこへ行くんや？」と聞かれ、「灯台と関道神社を見に行く」と答えると、「棒を持っていかんと危ないぞ。山道はイノシシが出るぞ」と予想外の言葉。あわてて棒切れを拾って恐る恐る山道を進むと、道の両側は確かにイノシシが掘り返した跡だらけ、しかも昼間なのに本当にイノシシが道を横切っています。燧灘の真ん中の離島にまでイノシシが泳ぎ着いてたくさん生息していることに驚きを隠せませんでした。



関道神社のナタオレノキ

その後も県内のあちこちを訪ねる際に、イノシシのことを尋ねると、中山間地だけでなく県内どこへ行ってもイノシシ

シによる農作物への被害の話ばかり。忽那諸島（中島）でもイノシシ退治に大変な労力をかけていることを聞きました。これから、人とイノシシとの戦いがどうなっていくのか非常に気になります。

最後に

人口減少問題が叫ばれていますが、限界集落と呼ばれる山村の集落にもはるか沖合の離島の集落にも住民の方々の生活があり、観光イベントにも縁がない静かな暮らしが営まれています。

生活していくための仕事や収入はもちろん必要なのですが、観光客を呼び込むことや経済的な利潤を追求することだけが幸せなのかどうか、サルやイノシシの存在も受け入れつつ、故郷で自然と共に生きるということが大切なのではないのか、何が本当の幸福なのか、いろいろ考えさせられた 3 年間でしたが、この哲学的な問題に対して自分自身の答えはまだ見つからないままです。



高井神島にて・島の皆さんと